



六甲山魅力再発見市民セミナー

市民セミナーVol.76
六甲山から広がる「生活景」
／栗山 尚子
2009年7月発行

第16回テーマ： 六甲山から広がる「生活景」

講演内容

- 神戸の景観と景観の保全
- 毎日登山と眺望
- わたしたちの「生活景」

実施日：平成21年7月18日（土）
午後1時～3時45分
場 所：六甲山自然保護センター



講師：栗山 尚子さん プロフィール
1977年生まれ 31歳。宝塚市出身。小林聖心女子学院高等学校卒業、神戸大学工学部建設学科卒業、神戸大学大学院建設学専攻修了。神戸大学工学部助手を経て、2007年より現職・助教（建築学専攻建築・都市設計研究室）。専門分野は眺望景観。



住吉川の「生活景」

六甲山上はアジサイが満開

晴れ渡った六甲山上は23℃。至る所でアジサイが満開でした。午前中は大垣グループ「ピカピカ隊」10名の応援を受けて、22名という大勢で3コースに分かれて、環境整備活動で気持ちよく汗を流しました。



ハチも集まるアジサイ

栗山さんは新進の女性研究者

神戸大学工学部の助教の栗山さんは、「女性が少ない工学部ですが、建築学科は3分の1が女性です」と、女性の進出が目立つことを紹介されました。

幼少時代から篠原の町に通い、思いがけず神戸大学に勤められ、坂道を登る生活をされています。留学されたアメリカのシアトルは神戸市との姉妹都市で、坂があり、湾を望む街です。「私は忙しくても食事は抜かない」と食通の生活も大事にされています。

ご専門は眺望景観や街路景観で、密集地帯の住環境整備や、人口減少社会でのニュータウンの動向も研究されています。積極的な提言が求められる領域であり、今後ますます活躍が期待されると思われます。

神戸らしい「生活景」を見直した

講演では、まず「神戸の景観と景観の保全」として、神戸の特徴的な景観を説明されました。「海と山が近いのが一番の特徴」とし、住民が愛する眺望景観を保全する必要性を強調されました。

続いて、神戸の生活景を代表する毎日登山について、登山者にアンケート調査された結果を解説されました。登山者は自分が毎日登っている登山ルートに愛着を持つという傾向を指摘され、都市特有の都市イメージを形成する眺望景観と、日々触れる愛着のある眺望「生活景」との違いを例示されました。

主催：六甲山を活用する会

協力：兵庫県立人と自然の博物館

後援：兵庫県神戸県民局、灘区役所、神戸市教育委員会

出席者を対象に「神戸らしい眺望景観」を調査すると、「ハーバーランドから見る眺望」が最高点でした。

記念碑台の展望台に出て、大阪湾を見渡しながら、眺望景観の話聞き、座学にない開放感を味わいました。

「生活景」とはふつうに生活している中で見慣れた景観であり、周辺の高層住宅などが景観を阻害している事例にも言及されました。

景観をもっと大事にしたい

日本では土地の所有が優先するあまり、景観が軽んじられる傾向があり、懸念していました。今回は「生活景」という視点を提供していただいて、景観を大事にすることが市民社会の重要な課題だと実感しました。栗山さんたちの主張や提言に、一般市民も声を合わせていく必要があると感じました。

※詳しくは、1、2ページをお読みください。

参加の感想 明角 正男さん

正直、生活景という言葉すら知らない中で、講師はしかも都市計画の専門家という、おおよそ、私どもには荷が重い話ではと思っていました。実際にはパワーポイントにより平易に話され身近な神戸の街の景観に触れられた。神戸市が全国にさきがけ、地区保全に取り組み、条例が制定された事は全く知りませんでした。住民VSデベロッパーの事例など、毎日眺めている当たり前の風景(生活景)とはその時代の社会を色濃く反映していることを考えさせられた次第です。



【助成金をいただいている機関】

イオン環境財団、大阪コミュニティファンド、公益信託自然保護ボランティアファンド、公益信託TaKaRaハーモニストファンド



第76回テーマ：六甲山から広がる「生活景」



第76回市民セミナーの流れ

市民セミナー

1. あいさつ：13:00~13:10
2. 講演：13:10~14:20
3. 質疑応答：14:30~15:30
(屋外展望台で景観の説明：15:05~20)

講演

- 神戸の景観と景観の保全
- 毎日登山と眺望
- わたしたちの「生活景」



熱心に耳を傾ける参加者

講演の挨拶（栗山 尚子さん）

こんにちは。神戸大学で眺望景観を専門に研究しています。神戸大学で都市景観の勉強をした後、一度民間企業に勤めて、また大学に戻って勤務するようになったのが経歴です。講演するのは初めてではありませんが、緊張します。気楽に聞いて下さい。



栗山さん

講演内容

1. 神戸の景観と景観の保全

■わたしの生活景



神戸大学百年記念館からの眺望

私は宝塚市出身で、小学校から高校まで小林聖心女子学院に通学した。神戸の篠原北町にはピアノを習いに幼少時代から通った。神戸大学には阪急六甲から歩いて通っている。大学院のときには交換留学制度でシアトルに留学をした。主要な都市だけでなく、どの都市にも個性がある。都市の個性を活用するにはどうしていったらいいのか、景観というところから考えていきたいと思っている。

■神戸の特徴的な景観

六甲山の南側の市街地と六甲山の北側・西側で取扱や保全のアプローチが変わる。北野：「伝統的建造物保存地区」として、景観保全の上で特別な位置づけがされている。周辺住民が景観保全に積極的なのも特徴に挙げられる。



フラワーロード

フラワーロード：新神戸と三宮を繋ぐ重要な場所で、景観保全の重点エリアとなっている。
旧居留地：近代洋風建築が集まっている。広告物の出し方について細かく規制されている。旧居留

地はビジネスエリアであり、企業が中心になって街並みの保全に取り組んでいる。

南京町：他の地域と違って看板を「賑やかにしましょう」というガイドラインをもっている。

舞子海岸：海との関係も神戸にとって切り離すことが出来ない。公園が整備されている。

郊外：六甲山の北や西に行くと、茅葺の民家が残っている場所がある。

研究学園都市：ニュータウンの存在も特徴。



南京町

■海と山が近いのが神戸の景観の特徴

神戸市の景観は、海と山が近いのが一番の特徴。六甲山があってこそ、神戸の景観の多様性がある。六甲山の南北で景観が異なる。南は斜面市街地で、街に特色があるところ多い。北は自然地域景観や郊外住宅地が特徴になる。

■神戸市は日本で初めて景観条例をつくった

神戸市は、昭和53年に日本ではじめて景観をコントロールする条例をつくった。平成16年には国が景観法という法律をつくった。景観計画区域で、建築行為等を行うときには法律に基づく届出が必要になっている。景観法は、景観保全をこれまで地方自治体が進めてきたことを踏まえ、地方の裁量に任された法律になっている。官制の都市計画から、草の根的なコミュニティをベースとした都市計画へ移行することが期待されている。

■神戸の眺望景観

六甲山の南の市街地は斜面の上にある。斜面の眺望には俯瞰景と仰瞰景がある。俯瞰景では市街地が開発されると、視対象である海が見えなくなる可能性が高い。仰瞰景では、視対象である山は雄大なので簡単には眺望は喪失されない。

山上から街を見下ろすと、建物は1個1個が分からないぐらい距離が離れている。建物が多少高くなっても眺望は変わらない。歩きながら見る景観（シークエンス）では、対象との距離が近いので、建物そのものが眺望に与える影響が大きい。

■眺望保全へのアプローチ

神戸らしい眺望とはどのような眺望か。保全したい眺望とは何かを示さないといけない。神戸は「美しい都市」というイメージがあってこそ評価

が高い。来街者を迎える眺望景観を保全しつつ、住民が愛する眺望景観を保全する必要がある。

2. 毎日登山と眺望

■神戸の生活景を代表する毎日登山

神戸の生活景を代表するもので、眺望が見えるもののひとつに毎日登山がある。六甲山には登山ルートが11個あり、そのうち4箇所で見望に関するアンケートをと



布引みはらし展望台からの眺望

った。神戸の写真を見せて、好きな眺望景観と神戸らしい眺望景観を選んでもらった。その結果、自分が日頃登っている登山ルートに愛着を持っている傾向が見られた。神戸らしい眺望を選ぶ質問では、ハーバーランドから見た眺望がダントツで選ばれた。生活上、日々触れる愛着のある眺望景観と、その都市特有の都市イメージ形成を促すような眺望景観に対する印象は異なっている傾向がある。

3. わたしたちの「生活景」

■生活景ってなんなの？

日本建築学会が出版した『生活景』では①人間をとりまく生活環境のながめ。②生活の営みが色濃くにじみ出た景観。③地域風土や伝統に依拠した生活体験に基づいてヒューマニズされたながめの総体。とされている。私はふつうに生活している中で見慣れた景観と思ってもらったほうがとっつきやすいと思っている。

■当たり前の風景が喪失した事例

東京の国立市で桜並木といちよう並木で有名な「大学通り」がある。通り沿いに建てられた高層マンションが景観を阻害しているとして、周辺住民らが建築主に高層部分の撤去を求めて裁判を起こした。

結果的には撤去は認められなかったが、景観利益の法的保護は認められ、その影響は大きかった。

これはどこでも起こりうる話で、地域の生活と深く関わりをもった生活景が簡単に喪失している現実がある。



背後にビルが立つ栄光教会

■神戸らしい眺望景観を判定！

神戸の眺望写真を次々に映写して、参加者で「神戸らしさ」を判定しました。最も神戸らしいとされたのは、「ハーバーランドから見る眺望」でした。一方、神戸らしくない眺望にも衆目が集まりました。

質疑応答

酒蔵は特徴的な景観に入らないの？：景観形成市民協定で、熱心に街づくりがされている。神戸市の景観保全地域には指定されていない。

神戸にも汚い場所がたくさんある。もっと神戸らしくする動きはないの？：私自身、日本の街はなぜこんなに汚いのかと思い、研究をはじめた。日本人は敷地のみで考え、街全体で考えない傾向がある。

まとめ(栗山さん)

自分が生活するうえで当たり前前に存在している風景とはどのようなものでしょうか。そういうことを一度考えてみたら家族の話題にもなるのではないのでしょうか。自分だけの生活景なのか、地域にとっての生活景なのか。地域にとっての公共資産として活用を考えていくと、街が生き生きすると思います。

事務局より

私たちはぼやっと景色を見ていることが多く、今回は意味とか奥行きを考える機会をいただきました。「生活景」を大切にするためには、ものを言う市民になる必要があると思いました。

◆参考・配布資料など

- ・レジュメ：六甲山から広がる「生活景」
- ・スライド：六甲山から広がる「生活景」
- ・「眺望景観連続セミナー」チラシ



栗山 尚子：
神戸大学大学院工学研究科建築学専攻
建築・都市設計研究室
〒657-8501 神戸市灘区六甲台町 1-1
電話・FAX：078-803-6024
E-mail:kuri@kobe-u.ac.jp

◆参加者の声

- ・「生活景」は新鮮。震災後、神戸らしさが失われた。
- ・神戸の町には六甲山のウエイトが大きいと再確認した。
- ・大学などの研究者がもっと強力に行政に対して街づくりの進言をしてほしい。

◆参加者：35名（50音順・敬称略）

浅井 審一	芦田 義和	飯田 昌邦	伊澤 信雄
泉 美代子	大垣 廣司	岡谷 恒雄	尾崎 尚子
兼貞 力	國里 吉秀	栗山 尚子	小林 吾郎
佐藤 泰仙	島本 隆之	竹ヶ原 泰三	田邊 征三
堂馬 英二	堂馬 佑太	豊立 拓也	南部 哲夫
橋本 いくゑ	西井 豊	長谷川 友彦	林 慶一郎
原田 忠彦	平井 庄一	藤井 敏夫	古本 美千子
松井 光利	松島 孝	松田 輝義	村上 定広
明角 正男	山口 賢三	米村 邦稔	